

調査日 群馬県森林組合連合会共販所 6月5日

今日の市は物件数としては多かったらと思う。売れる物については応札枚数も複数の応札がありそれなりに動きは感じた。また市場側も、売りにくい寸法の物や瑕疵のある物件といえども、価値が合わぬと判断すれば、躊躇なく不落札にし、再入札で交渉するなど売り方・買い方双方での10円100円単位で丁々発止の駆け引きが見られた。結果として応札がありながら不落札の物件も何件か出ている。しかしこれらは買い方の関心があるので、遠からずに売れるだろう。

問題なのは、明細書の中で空欄になっている物件だ。県森連の明細書には瑕疵があれば樹種の欄に”曲り”とか”大節”とか”目回り”などと表示してある。因みに”目回り”とは木口を見て年輪に沿ったヒビの事を言う。このヒビは丸太全体に通っている場合が多いので、使い方には注意がいる。話を戻して、明細書の空欄の物件だが、こう言った瑕疵の表示の無いものも含まれている。

その半面で瑕疵の表示がある物もそれなりの値段で応札され、売れている。

この差はどこから生まれるのか？ と言えば極毎に理由があるのだが、押しなべて言えば今あまり必要とされていない寸法だと言えるだろう。

スギの4.0mの中目材なども含まれるが、多分ひっ迫している訳では無い様だ。

こうなると、木質を比べられる。冬目の硬そうな木は癖が強く嫌われる。少量なら付き合ってくれるかも知れないが、量が増えたと札が入らなくなる。「関わりあいたくない」と言った程だ。

太い物は尚更この傾向が強い。極番号の26号～29号まではおそらく林内ではなく、屋敷木かもしくは広い所に立っていた4本の大木だろう。28号と29号が元玉だろう。周りに障害物が無く風当たりが強いと29号の様に目回りが入る事がある。風で揉まれているうちに内部で年輪が剥がれてしまう。更に日当たりが良いから、枝は伸ばし放題で四方に枝を伸ばし、一番下の枝も日照を受け続けるので枯れ落ちずに太り続ける。買い方はこう言った木の生い立ちも見抜いて値を決める。

前回の市況を見てみると、売れているのはスギの3.0mでは20cm～28cm・4.0mでは22cm～28cmとどちらも中目材と呼ばれる太さである。この辺りは100% 落札しているが、量的には3.0m・4.0mをあわせても40m³程度だ。この辺りはもう少し生産しても売れるだろう。落札価格の方は4.0mは前回比が大きく上昇しているが、無視してよい。肝心の荷は小さな値動きが連続して起こる事だ。

3.0mは太い物でも、芯の部分で柱を取るのが今どきの工場のシステムだ。実は太い木であれば、その外側の部分が材質的には最高の部分である。芯の方には枝があるが、外側の部分は枝も無くなるし年輪幅も詰まってくる。しかし今の柱工場のラインはこの部分は有無を言わず集成材様のラミナーのラインに流れて、端材の利用として使われている。ある買い方がラミナー用に積まれた材を見て余りにももったいないと、買い取って救い出した話も聞いた。もう柱だけに依存する工場から次のシステムへ移行を目指す時かもしれない。福井県のファーストウッドでは早くから取り組んでいた様だ。自社で生産した材で、全国的に建築業を展開している。本県でもよく見かける”一(はじめ)建設”である。県森連の”WEB入札”については、次回触れる事にしよう。

調査日 素材生産協同組合 6月7日

こちらの市では、何を置いても故剣持所長のご冥福をお祈り申し上げます。

着任して2年目を迎え、フレッシュマンも3名加入し、「さあ、これからは剣持体制が始動する」と言った矢先の訃報でありました。素生協の関係者は元より、何よりも本人が一番無念であったらと思うと剣持所長の心は、これからも県産材流通センターに寄り添い、センターを守ってくれると信じます。

また私も現役時代から重ね重ねお世話になりました。安らかに眠りください。

さて、市の方だが、時期的な事もあり入荷は少なめの様だ。

国有林材が出始めた。今回はヒノキの3.0mが1件だけだったが、その他にもヒノキの3.0m材で今回の市に掛かったのと同じサイズの物が30〜40m³ほど入荷していた。

おそらくこのままの仕分けでいくつかの桷にして市にかけられるだろう。こちらの市では秩父の買い方が積極的に買い進めている。あまり細かい仕分けにせず、一気に売るのが得策だろう。

買い方もいつもの顔ぶれが見えず、心なしか寂しい気がした。

こちらの市は、広葉樹の種類も多いが、スギ・カラマツの2.0m材が多く出品される。

買い方もそれに合わせて、カラマツは合板メーカーなど加工製品を作る買い方で常連さんがいる。

また スギの2.0m材はバイオ燃料などの他土木用材などの常連さんがいる。

今回、この種の物件が同じ買い方に偏っているのも、競争が無かったせいだと思われる。

特にスギの2.0m材については、落札の最低価格が6,000円/m³と承知しているように思われる内容だが、もう少し参加者が多ければ他の買い方の中に埋もれて日の目を見る事がなかった札だろう。

この辺りも、6,000^円/m³で同じ買い方の名前が続くと、やはり入札参加者は少なかったのだろう。

カラマツを買う業者やスギの2.0mを買う業者がスギやヒノキの柱材や4.0m材を買う業者と競合する事はほとんど無い。また8cmφ以下の細丸太を買う業者もまたしかりで、多くても2社位で競争している。従って落札者を見れば、どんな使われ方をするのか見当が付く。

材の方は少ないながらも新入荷の材は、皮剥けが激しくなっている。

これは前橋の市でも同じ様な、状態だが昨今は丸太を鳶で動かす事は無くほとんどグラップルで動かす。この事でいつも掴む場所はいつもの場所になる。水揚げ時季の浮き上がった樹皮は真ん中辺りから剥け始めるが、先ずは伐倒の衝撃から始まり搬出のトラックの荷台で振動によって擦れ、市場の土場へ降ろされた時にはかなり剥けている。更に選別機で擦られ桷積されたときは半分以上の樹皮を失っている物もある。梅雨に入れば尚更だが、そう悪い事でもなさそうだ。

皮の無い所は虫害を受けにくいからである。但しあまり長くこの状態が続くと夏の暑さで”胴割れ”が起きる。木口のヒビよりもずっと深刻なヒビ割れで、価格にも影響する。